

冬晴れの陽気が、午後の公園を包んでいた。

相変わらず風は冷たいが、日向にいる分には、ぼかぼかと温かい。もつとも、ベンチに座るアーサーは、コートを二重着に込んだ上、マフラーを巻き付けた重装備だった。

心地よい冬晴れだろうと、解放感ある公園のベンチだろうと、外は外。基本的に自室に籠もって発明をしていたアーサーにすれば、望んで居たい場所ではない。

それでもアーサーは立ち去る気配を見せず、どこか気怠げな眼差しで、ぶかぶかと煙草をくゆらせていた。

その煙草も、そろそろ三分の二が灰になる。

アーサーはわざわざ部屋から持って来た灰皿に吸い殻を捨て、ごそごそとポケットを漁って煙草の箱を取り出した。

紙巻き煙草を一本くわえる。

すると、スツ、と横から火の付いたマッチが差し出された。

アーサーは気怠げなまま、じろつとマッチの持ち主を見やる。それからマッチの火を無視して、自作の電気式ライターで、バチツ、と火花を飛ばし、煙草に火を付けた。

モリアーティは肩を竦めてマッチの火を消すと、アーサーが座るベンチの、反対側の隅に腰を下ろした。

「あんな風に《沈黙館》を使えるなら、最初からもっと活用したらどうだね」

「今回は例外だ。幸いと言うべきか、ジャックの件では姉たちに大きな貸しを作れたからな」

「にしてもだ。これは負け惜しみで言うわけじゃないが、あれから一週間と経たない内に呼びつけるなんて、些か無粋というものじゃないかい？」

「《クラブ》の全力の嫌がらせに根負けして、呼び出しに応じたんだろ？ それは、立派な負け惜しみだ」

「君と会って話すだけなら、なんの害もないからね。ここ数日被害を被っている裏嫌がらせ工作で同志たちの胃に穴を開けるよりは、散歩に出ようと思っただけさ」

モリアーティは優雅に足を組み、「それで？」とアーサーに問いかけた。

「答え合わせがしたい」

「ジャックの件でまだ何か？」

「最初の事件について」

アーサーはそう言うのと煙草の箱を開けたまま、スツとモリアーティに差し出した。モリアー

ティはちらつとアーサーの顔をうかがってから、煙草を一本つまみ、くわえた。

マッチで火を付け、くゆらせながら、

「ではまず、答えを聞こうか」

「君には幾つもの名前がある。アイリーン・ドイル。《教授》プロフェッサー。モリアーティ」

イエス
「うん」

「ジェームズ・ワトソンも、そのひとつだ」

イエス
「ああ」

あつさり認めたモリアーティを、アーサーが横目に見据える。

モリアーティはもう一度肩を竦めた。

「別に驚きはしない。たぶんその件だと、想像も付いていたしね。一応、解に辿り着いた式も聞こうか？」

「……君がロンドンに現れたのは、いまから十年前の革命暦八九年。ただ半年後に姿を消し、次ぎに現れたのは七年後の九六年だ。この七年間は、孤児だったコナンが兄とーそれまで存在も知らなかった、生き別れの兄を『名乗る』男と再会し、共に暮らした期間に一致する」

「ふむ。他には？」

「そもそも、君がコナンの兄だという前提がなければ、今回の事件における、君やジャックの行動が説明できない。あのあと姉たちに確認を取ったが、ジャックが《ディオゲネス・クラブ》に接触したのは、いまから三年前——君が再びロンドンの暗黒街に戻った九六年だった。これは、コナンの兄が死んだ年だ」

「……続けて」

「三年前、確かに君は暴漢に襲われたんだろう。裏切り者を始末しに現れた刺客、つまりジャックに。ただ、死にはしなかった。このときジャックが任務に成功していれば、その後のロンдонはかなり平和だっただろうな」

「その代わり、コナンも死んでいたはずだ。私の道連れで」

「……………」

皮肉を口にしたはいいが、その点を失念していたらしい。アーサーは、むつ、と唇を横一文字に結んだ。

モリアーティは紫煙をなびかせ、小さく笑う。

「それから？」

「……君は死ななかったが、危機感を持ったんだろう。そこで、コナンと別れ、暗黒街に戻った。一方ジャックは、地下に潜った君を狩り出すために、組織力を必要とした。それで、君や《ギアス》の情報を手土産に、《ディオゲネス・クラブ》に自分を売り込んだ」

「……別れたコナン・ワトソンはどうなったのかな？」

「そこだ。ここからは僕の想像が入るが、君は多分、コナンが自分の跡を追うと考えた。身の危険を考えず、暗黒街まで追ってくるだろうと。また、君に近付けばジャックの目に止まることも考えられる。そこでコナンの未練を断つために、自ら死を装ったんだ」

「……つまりコナン・ワトソンは、七年間過ごした兄を、兄の仇と勘違いしていたのかい？」

「君は変装の名手だ。いまの君の姿が本来の君だなんて思っちゃいけない。というより、『本来の君』なんて存在しないんだろう？ 名前だけじゃない。アイリーン・ドイル。《教授》プロフェッサー。モリアーティ。ジェームズ・ワトソン。どれも君だが、君のすべてではない。君がコナンに言った台詞は、僕も彼から聞いたよ。『モリアーティ』が『ジェームズ・ワトソン』を殺した、ってね。確かに、間違っではない。『彼は始めから死ぬ定めだった』というのも本当のことだ。『ジェームズ・ワトソン』はコナンのために作られ、『そのときが来た』から、コナンと別れて『死』んだんだ。

なんでもジャックは、モリアーティとジェームズ・ワトソンの因縁は、《ギアス》に目覚めた者にはよくあることだと、コナンに向かって言ったらしい。自覚的に人格を切り分け、作り替えるやり方——というより一種の思想だな。これは案外、《ギアス》を究明する過程で生まれたものなのかもしれない」

アーサーは淡々と自らの推理——想像を口にした。

モリアーティは、途中で反論することも、口を挟むこともなく、黙って煙草をくゆらせていた。

最後の感想を聞いてから、しばらく間を置いて、

「……そうだな」

とだけ答えた。

「もちろん、変装だけじゃない。人の精神に作用する《ギアス》を研究してるんだ。当然、《嚮団》では催眠暗示の研究も行っていたはずだ。ジャックがあれだけ暗示術を駆使していたんだから、君が使えないわけがない。コナンは事件前後の記憶が曖昧だが、これは彼が記憶を操作された証だろう」

「……何しろ七分だからね。それでも、後遺症は最小限に抑えられたはずだよ」

「何が目的だったんだ？」

「うん？」

「何か重大な理由があったのか？ でなければ、どうして路上で暮らす孤児と、暗黒街のボスが七年も？」

実を言えば、その質問こそ、アーサーが一番聞きたかったことだった。

コナンはあまり、死んだ兄のことを話さない。しかし、希に口にするときは、見るからに誇らしげで、楽しげで、幸せそうに見えた。アーサーは、自分の家族との違いに、苦笑いを浮かべたものだ。

コナンの記憶にある兄の姿が、すべて捏造だったとは思えない。

しかし、モリアーティがコナンに家族として接した理由は、さらに想像が付かなかった。

「……タイミングだよ」

「タイミング？」

「そう。あのころ私は政府の執拗な捜索に嫌気が差し、一度仕切り直すことを考えていた。ちなみに、一番厄介だったのは、政府の要人に裏で助言する、当時十代の双子の少女たちだったよ」

「……え？ いや、待て。嘘だろ？」

「向こうは向こうで大人たちが言う通りに動かず、歯噛みしていたようだがね」

「……聞かなかったことにしよう」

「とにかく、一度身を隠すことを考えていた時期に、偶然コナン・ワトソンに出会った。きっかけはなんだったかな。もう忘れてしまったな。調べると、彼の両親の死には、同志の一人が関わっていたことがわかった。もちろん、彼が《解放者》として目覚める前だがね。ただ、その同志は責任を取りたいと言いつ出した。だから、代わりに私が保護することにしたんだ。姿を消すための新たな身分と立場——隠れ蓑として利用するために」

「……それで七年も？ 政府の捜索を躲すが目的なら、いくらなんでも長過ぎる」

「そうだな。私にとっても、七年は短いとは言えない」

「なら、どうして？」

「どうして……だろうね。生憎、明確な解は示せないな。多分、今回ジャックに付け入る隙を与えてしまったのも、私が明確な解を出せずにいたからなんだろう」

そう話すモリアーティの横顔は、シンプルなくせに奥深い難題に挑む、数学者のように見えた。

確かに、モリアーティの話した内容に、正解が示されていたかはわからない。

ただ、一番聞きたかったことは聞いた。アーサーはそう思った。

「……私からも聞いていいかな？」

「なんだ？」

「あの晩、君はコナン・ワトソンに対し、こう言った。『君は、その《ギアス》を押し返せる』と。確信に満ちた指示だった。どうしてそんな確信を得たのかね？」

「……コナンが君の《ギアス》をすでに受けていたからさ」

アーサーが答えると、モリアーティの瞳に好ましがな好奇が煌めいた。

「それが、ジャックの《ギアス》を押し返す理由になる、と？」

「ジャックの《ギアス》が持つ『機能』に関しては、あの時点で概ね推測ができていた。他人の中に自分の人格を複製する。大変強力で恐ろしい力だ。だが、強力過ぎる。仮になんの制限もないとすれば、彼はとくに君を始末できていたはずだ。特に納得が行かなかったのは、ジャックが必ず《解放者》を『殺害』していたことだ。なぜ《ギアス》を掛けない？ 彼の《ギアス》を一番有効に思おうと思えば、君の組織内に自分の分身を送り込むことだ。幾らでも情報を得られるし、組織を内側から破壊できる。ジャックが思いつかなかったはずはない。つまり、《ギアス》を掛けなかったのではなく、掛けれなかったんだ。残念ながら詳しい条件まではわからなかったが、ひとつだけ、明確な結論が導き出せる。

ジャックの《ギアス》は、君の《ギアス》を受けた人間には通用しない。

姉たちの分析だが、君の《ギアス》を受けた者は、精神的に強くなるらしい。人格的強度が上がる、と表現していたっけな。だからこそ、他者の人格など受け付けなくなるんだろう。ああ、そうだ。コナンは君とすれ違ったときに君の顔を見たことがあると思いついたそうだが、これもおそらく同じ理由だと思っぞ。君の《ギアス》で目覚めた彼は、過去の暗示など突き崩すほど強かったのさ」

アーサーはそう言っつて、煙草の煙を鼻から吹き出した。

いつしかモリアーティは身体を捻って、完全にアーサーの方に顔を向けていた。

「……どうして私がコナン・ワトソンに《ギアス》を掛けていると？」

「それが君の根幹にある行動原理だからだ」

アーサーの台詞に、「ほう？」とモリアーティがさらなる興味を募らせる。

「君は金のために《解放者》を増やしているわけではない。権力欲がないことも、一度暗黒街を離れたことでわかる。なら、君の目的は何か？ 《嚮団》と同じだ。『《ギアス》の究明』以外に考えられない。君は、自分が見込んだ人間には《ギアス》を掛けずにいられないんだ。当然、コナンがその対象から外れているわけがない」

アーサーは煙草を吸いながら、横目にモリアーティを見やる。

「コナンから聞いたが、あいつは兄に保護されたあとも、結構な暴れ者だったそうじゃないか。それが、兄の死後、まるで『人が変わった』ように真面目に医者を目指し始めた。辛い幼少期で荒れていた彼の、『本当の願望』はそれだったんだろう。

人を助けたい。

違うかい？」

「……残念だ。君に双子の姉さえいなければ、すぐにも《ギアス》を掛けていたよ」

「……僕はいま珍しく姉たちに感謝しているよ」

そのときのモリアーティは明らかに本気だった。アーサーは、そう言えば呼び出しておきながら、なんの備えもしていなかったことに、いまさらながら気がついた。

「正直に言うと、コナン・ワトソンは私にとって、貴重なサンプル・ケースだ。これまでに色んな人間に《ギアス》を掛けて来たが、彼のように他者に奉仕することを望む者は現れなかった」

「……君が『見込む』対象に偏りを感じるね。どうせ、日頃、悪党ばかり見ているんだろ」

「認めざるを得ないが、彼が希有な例であることに変わりはない。本当にこのまま真つ当な医者になるのか、ぜひ見届けたいと思っている。なるべく遠くからね」

「思い出した。どうやら、アイリーン・ドイルが急に依頼を取り下げたのも、僕の側にコナンがいるのを知って慌てて距離を開けたから……で正解のようだな」

「不要な刺激は与えたくなかったのさ。君も、あまり彼を、刺激的な事件に引き込むな」

「余計なお世話だ。元より僕は、事件なんかに興味はない。それより、今回の件で、コナンは君を捕まえる決意をしたみたいだぞ？ これからも犯罪組織の黒幕を続けるつもりか？」

「犯罪組織の黒幕を続けたいと思ったことは一度もないが、社会は私の探求の在り方を、犯罪組織の黒幕と見なすらしい。代表は、君の二人の姉だ」

「……必ずまた、僕と君は敵対するだろう。そのときコナンがいるのは、君ではなく、僕の隣だ」

「それも一興さ」

ちょうど、モリアーティは煙草を吸い終え、吸い殻を灰皿に落としたり。

ベンチから立ち上がる。

そして、

「アーサー君。弟をよろしく頼むよ。私が言うのもなんだけど、弟は、良いやつなんだ」

アーサーは全身を硬直させた。顔を上げるとそこに、直前まで話していた男が……そして、初めて会う男性が立っていた。

声はわずかに違う。だが顔は変わらない。

なのに、その男性が醸し出す空気は、驚くほどコナンに似通っていた。

「……ああ」

とアーサーは辛うじて返事をする。

「……そうだな。あいつは、良いやつだ」

アーサーの返事を聞いて、ジェームズ・ワトソンは得意げに笑う。

それから、アーサーに背中を向けた。

「楽しい会談だった。だが、これが最後になることを願おう。良い発明を、アーサー・ホームズ」

そう言って、モリアーティはベンチを離れ、公園から去って行った。アーサーは彼が見えなくなるまで目で追ったあと、すっかり灰になっていた煙草を、灰皿に捨てた。

葉が落ちた冬の公園の木々を漫然と眺めながら、もう一本火を付けるか考え……結局は灰皿を手に、ベンチから立ち上がる。

そして、モリアーティが去ったのとは、反対の方向に歩き始めた。

冬晴れの陽気は相変わらず、辺りを温かく包んでいる。だが、それもいまの内だけだ。夜になればまた、アーサーの暮らす街は、深い霧に閉ざされる。

深い霧が何もかもを、曖昧で不確実な「現実」の中に隠してしまう前に――

アーサーはベーカー街222Bを目指して、家路についた。